

A 大学学生が難しいと捉える沐浴技術の傾向

—看護学科と幼児教育学科の沐浴演習を通して—

木下 照子*・谷野 宏美

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

沐浴は養育者が家庭で行う育児技術の一つであるとはいえ、学生にとっては難しい技術であることに変わりはない。そこで看護学科と幼児教育学科の異なる学科の学生が沐浴演習を通して難しいと捉える傾向を明らかにすることを目的として調査した。沐浴演習終了後に難しいと捉えた技術や遭遇場面を記述したものをデータとし、内容分析を行った。その結果、両学科の難しいと捉えた内容からは【児の固定及び体位変換や洗い方・流し方】【沐浴実施における要点】【水(湯)の使用】【沐浴モデル人形の活用】【沐浴の過程を通して気づいた点】【自己評価・感想】の6カテゴリーが抽出された。沐浴の一連の過程には多くの技術を伴うため、沐浴過程において、技術または遭遇場面に難しさを感じていることが分かった。教育内容や方法として難しいと捉えている技術や遭遇場面を丁寧に教授することの必要性が示唆された。

(キーワード) 沐浴技術, 学生, 演習, 看護学科, 幼児教育学科

はじめに

沐浴の対象である児は成人と比べて体重のわりに体表面積が大きく低体温になりやすい、感染に対しても抵抗力の弱いことから清潔ケアは適切に行わなければならない。また巷野らも児は体温調節機能が特に未熟な時期なので、生理的欲求に速やかに対応することが健康管理の留意点であると述べている¹⁾。保育の基本は何よりも児が安定した状態であることが重要である。沐浴には浴槽につけ洗うことだけでなく、臍の消毒や脱衣・着衣・抱っこなど複数の技術が含まれており、手順や留意点が多いのが特徴である。したがって、いかに危険な要素が多く含まれているかについて報告があり、沐浴に関する事故予防教育について提示している²⁻³⁾。しかし、学生たちは沐浴演習が不安と緊張の中にあっても児への思いやり、愛おしさをもって実施している。児への働きかけやケアが学生にとっても楽しいと思うことによって、難しいと捉える技術や遭遇場面が緩和できるのではないかと考える。そこで学生が難しいと捉える技術や場面を抽出し、今後の沐浴演習において、演習時の強調すべき視点や方法の示唆を得ることを目的とした。

1. 研究方法

調査期間：2012年11月～2013年2月

調査対象：A看護系大学2年次生64名、A短期大学幼

児教育学科1年次生52名

調査内容：沐浴演習後に沐浴技術を通して難しいと感じる技術及び遭遇場面について自由記述とした。

分析方法：看護学科、幼児教育学科の自由記述から、記述内容の一文を2つ以上の意味を含まないように区切り、一文、または一文節を一意味としてコードとした。抽出した内容を類似した意味内容ごとに分類し、KJ法で質的帰納的に内容分析を行い、分析したものをサブカテゴリー化し、カテゴリーを抽出した。研究者間で繰り返し検討した。

倫理的配慮は以下の通りである

1. 研究に関しては、学生に研究の目的、意義、方法や結果を公表しても良いかどうかの説明を口頭と文章で行った。
2. 研究参加同意書を渡し、研究協力は個人の自由であり、不参加による不利益を被らないこと、また成績とは無関係であることや授業評価に関係ないことを説明した。
3. 得られたデータは、研究目的以外には使用しないこと、個人が特定されることはないこと、また個人のプライバシーを保護することを説明した。
4. 協力に同意しても、2013年4月末日までは撤回できることを説明した。
5. 書面で同意を得たものについて研究対象とした。

*連絡先：木下照子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

2. 結果

1) 看護学科(以下看護とする)の場合

調査用紙配布 64 人, 回収 60 人 (回収率 93.8%) から得られたデータ 368 件のコードを抽出した。コードから意味・内容ごとに 1 件として抽出し K J 法で質的帰納的に分析した。結果, 30 のサブカテゴリーが抽出され, 6 カテゴリーが形成された。カテゴリーは【児の固定及び体位変換や洗い方・流し方】106 (28.8%), 【沐浴実施における要点】94 (25.5%), 【水(湯)の使用】47 (12.8%), 【沐浴モデル人形の活用】48 (13.0%), 【沐浴の過程を通して気づいた点】42 (11.4%), 【自己評価・感想】31 (8.4%) である。

2) 幼児教育学科(以下幼教とする)の場合

調査用紙配布 52 人, 回収 49 人 (回収率 94.2%) から得られたデータを 206 件のコードを抽出した。30 のサブカテゴリーが抽出され, カテゴリーを 6 カテゴリーとした。カテゴリーは【児の固定及び体位変換や洗い方・流し方】51 (24.8%), 【沐浴モデル人形の活用】42 (20.4%), 【沐浴の過程における要点】35 (17.0%), 【水(湯)の使用】26 (12.6%), 【沐浴の過程を通して気づいた点】17 (8.3%), 【自己評価・感想】35 (8.4%) である。以下表 1 に看護, 幼

表 1 看護学科と幼児教育学科の沐浴演習後に難しいと捉えた技術及び遭遇場面

看護学科	幼児教育学科	看護学科と幼児教育学科	
コード数 368	コード数 206	サブカテゴリー 30	カテゴリー 6
106 (28.8%)	51 (24.8%)	首の固定や頭部の支え方	児の固定及び体位変換や洗い方・流し方
		後頭部・手掌の洗い方	
		石鹸の流し方	
		児の体位を変える時(体位変換)	
94 (25.5%)	35 (17.0%)	声をかけるのを忘れる	沐浴実施における要点
		声をかけると手元が遅くなる	
		手順を考えながら行うと時間がかかる	
		観察と手技は同時にできない	
		児をみていない	
		児の固定部分のずれによる危険性	
47 (12.8%)	26 (12.6%)	顔・鼻・耳に水がかかる, 入る	水(湯)の使用
		沐浴上がり拭けていない	
		温度の調整	
		湯の温度が下がる, 児の体温が下がる	
48 (13.0%)	42 (20.4%)	人形だから良かった	沐浴モデル人形の活用
		本物ならもっと慎重にしなければならぬ	
		児が重く, 腕がだるく痛い やっている支える手が痛くなる	
42 (11.4%)	17 (8.3%)	沐浴槽の調整	沐浴の過程を通して気づいた点
		腕や腰への負担(ボディメカニクス)	
		物品の確認	
		練習する必要と練習がしたい 児の衣服着脱	
31 (8.4%)	35 (17.0%)	手順ができた	自己評価・感想
		楽しかった	
		意欲的にできた	
		母への感謝 気持ちよい沐浴をする	

教のデータを示す。

3. 考察

6 のカテゴリーからは, 沐浴の準備から沐浴後の着衣まで一連のなかでどの過程においても困難と感じた技術があることが明らかである。また看護, 幼教のコード数の違いがあるものの困難とする部分や遭遇場面は同様であった。

1) 【児の固定及び体位変換や洗い方・流し方】

浴槽内において行う技術は, 特に安全に安楽に配慮する部分であり, 沐浴を行うための難しい技術である。看護で 28.8%, 幼教で 24.8% のコードとして抽出されたように, 首や頭部の固定に難しさを感じているようである。頭部の固定においては今田らが指示しているように⁶⁾, 小指指間小球部分の圧力方法について活用し安定を試みたいと考える。また, 腹臥位への体位変換については, 児を仰臥位から反対の手に持ち替えて腹臥位にする技術は, 児の取り扱い技術が十分でなければ難しい部分である。これは鷲尾による⁷⁾, 苦手な技術は児の頸の支持と腹臥位への体位変換であることと一致している。これらも沐浴以前に新生児の取り扱いを演習しておくことの必要性があるといえる。さらに洗い方や流し方についても, 演習では石鹸を使用するため泡で滑り, 十分に洗い流せないなど難しい技術が多いことがわかった。

2) 【沐浴実施における要点】

沐浴技術には, 児に声をかけることによって児の安定, また実施者の安定も踏まえ大切なことであるが, 手順や経過にとられ声かけを忘れる, 声をかけると次の展開が分からなくなるなど, 声をかける余裕がないことが分かった。沐浴時間は 5~7 分程度としているが, 沐浴手順の一連を確認しながらの実施では時間が必要になる。しかし練習により手順を理解することで時間は短縮できると考えられる。また児の観察については声かけと同様に手順を考えながら実施している。しかし児が見えていないことや児を浴槽内に沈めるなど危険を回避するには至っていない。学生は危険予知はできていが, 実施に至っていない。この予知できる能力を活して演習では技術を伸ばして行きたい。

3) 【水(湯)の使用】

浴槽内で動作を行うたびに顔・鼻・耳に湯がかかり, また湯が入るなど, 拭いてもまたかかりと繰り返しになり, 沐浴布(ガーゼ)の扱い方に戸惑いがある。湯を使うという沐浴技術の特性が難しい部分であるといえる。湯上りに児の身体から水滴を取り除く技術困難からも, 児の扱いが十分でないことが分かる。また宮腰らも沐浴には温度(湯温)や沐浴時間の調整が児に応じて必要であることを報告している⁸⁾。同様に学生たちも沐浴時間の経過と

ともに湯温の低下に気づき、児の体温に影響することなど、湯温が重要であることは理解できるが、その調整が難しいとある。

4) 【沐浴モデル人形の活用】

モデル人形でよかった、本物ならもっと慎重に行なわなければならないという思いが表われている。伊藤は沐浴実施体験から「動き泣く」新生児を沐浴させることを本当に『難しい』と捉えていたとある⁹⁾。このように、本研究においても実際の児をイメージし、沐浴を実施していることが分かる。看護は13.0%であるが幼教では20.4%がモデル人形を通して沐浴の難しさや不安の部分をはっきりとしている。モデル人形で沐浴をすることから本物の児をイメージして、きっと泣くであろう、動くであろう、ここに気をつけるなど確認しながら行っていることがわかる。イメージすることは必要であり実際と同じように児の取り扱いができるよう指導が必要である。また、モデル人形の重さも難しい要因になっている。しかし、沐浴モデル人形は出生新生児と同様に身長約50cm、体重約3kgである。人形は物として重く感じられるし、浮力も感じられなかったのかもしれない。学生の腕・肩・手の痛みが挙げられた。

5) 【沐浴の過程を通して気づいた点】

学生は腕や腰への負担から沐浴槽の調整が必要であるとしている。学内の沐浴槽の高さの調整は難しいが、身長に合わせた踏み台や腕の固定位置を確認すべきであった。具体的教授内容にはボディメカニクスや正しい位置・姿勢の指導が必要である。また、沐浴経過の一技術ごとに沿った使用物品の配置や位置確認ができる方法を指導することが重要である。

6) 【自己評価・感想】

看護8.4%、幼教17.0%は難しいとする沐浴技術より学生の沐浴・児に関する意識・認識についてである。人形でもかわいい、母への感謝の気持ちがわいてくる、演習は意欲的にでき楽しかった。誰かに助けてもらわないとできないこともある、児にとって安楽な沐浴は集中力・児との信頼関係そして児とのスキンシップが大切であるとしている。このように学生が持っている能力を活用し授業に取り入れ、難しいと捉える技術をできる技術へと変化させたい。

以上のことから、学生が難しいと捉える沐浴技術の傾向が明らかになった。これらを踏まえて、学生は児と接することに戸惑い、不安や緊張が起こることを前提に実践への対応ができるよう教授することが必要である。また沐浴は原理原則に従うことで実施できることや学生の持っている児への意識・認識を守りながら、自信を持って沐浴に取り組めるよう指導する。沐浴の知識・技術は練習を重ねることで実施できるようになるが、難しいと捉えていることを緩和するには、学生の児に対する思い

や学ぶ意欲のある学生の姿勢を大切に専門職としての意識を育てていくことが一方法である。

謝辞

本研究にご協力くださいましたA大学2年次生、A短期大学1年次生の皆さまに深く感謝いたします。

文献

- 1) 巷野悟朗, 高橋悦二郎: 新訂 保育の仲の保健 幼稚園・保育所での保健指導の理論と実践. 17, 萌文書林, 東京, 2006.
- 2) 橋本智恵美, 氏平美智子, 行光美音子他: 母性看護学臨地実習における医療事故に対する認識及び予防教育の実態調査. 第32回日本看護学会論文集: 看護教育, 188-190, 2001.
- 3) 氏平美智子, 行光美音子, 橋本智恵美他: 母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハットまたは医療事故体験の実態. 第34回日本看護学会論文集: 看護教育, 15-17, 2003.
- 4) 氏平美智子, 行光美音子, 木下照子他: 母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハット体験から考える事故予防教育. 第36回日本看護学会論文集: 看護教育, 137-139, 2005.
- 5) 行光美音子, 氏平美智子, 木下照子: 橋本智恵母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハットまたは医療事故体験の実態. 第35回日本看護学会論文集: 看護教育, 24-26, 2004.
- 6) 今田葉子, 斉藤真, 永見桂子他: 新生児の沐浴技術における児頭固定の早期習得に関する研究. 母性衛生, 50(1), 165-173, 2009.
- 7) 鷺尾弘枝: 沐浴技術に対する学生の気持ちと技術困難感を中心とした沐浴技術教育の考察 2回の沐浴演習後の質問紙調査より. 畿央大学紀要, 8(2), 57-64, 2011.
- 8) 宮腰由紀子, 池田明子, 石橋光子他: 沐浴と新生児体温変動. 千葉県立衛生短期大学紀要, 1(1), 19-25, 1983.
- 9) 伊藤良子: 新生児期における沐浴実施学習体験での看護学生の学び. 京都市立看護短期大学紀要, 34, 83-89, 2009.

